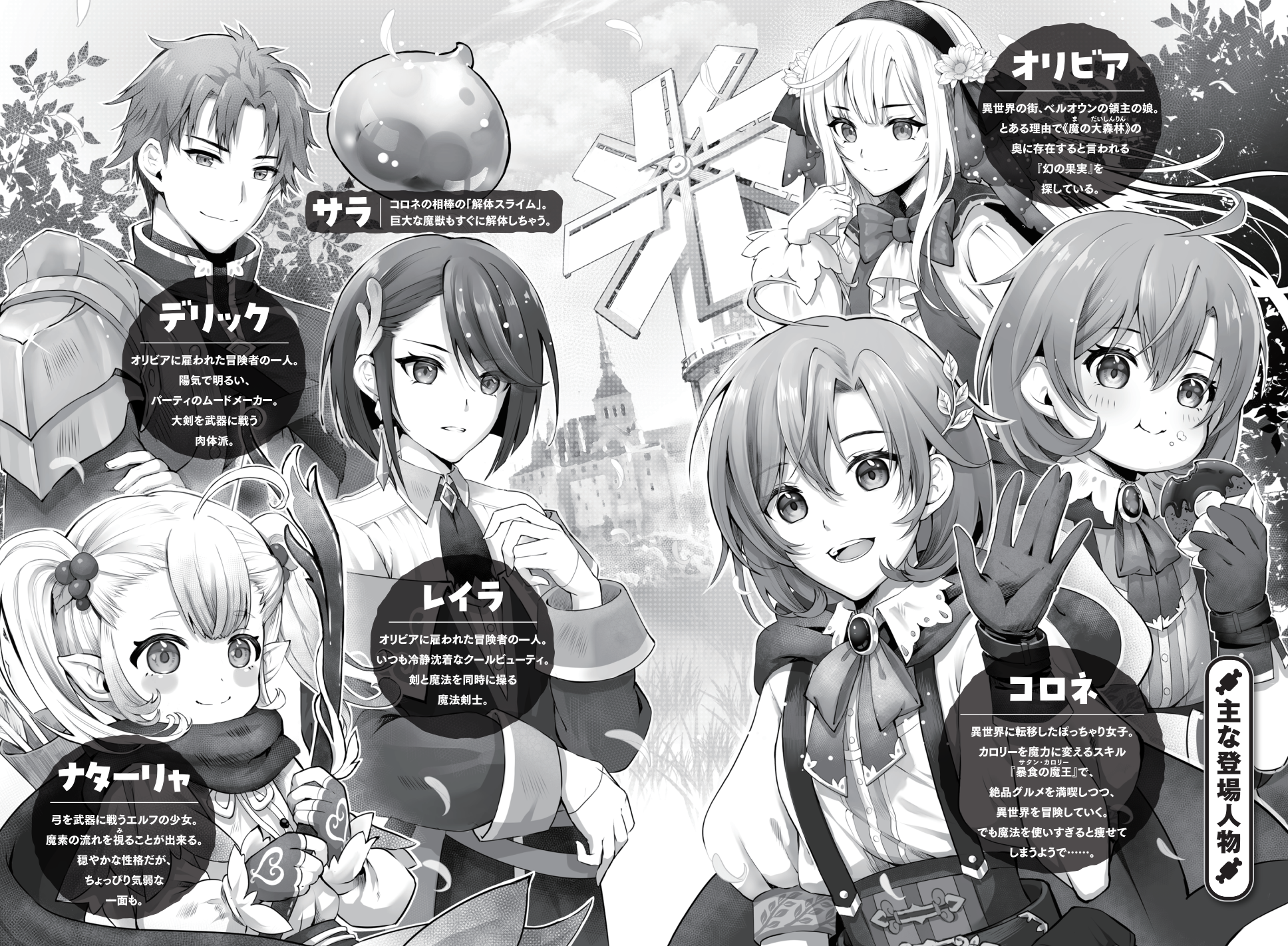
異世界ぽっちゃり無双

チートスキル『暴食』で最強&飯テロセカンドライフを満喫します！

空戯ケイ

illust. Nyansan

Chubby Hero's
Reign in Another
World


主な登場人物
オリビア
異世界の街、ベルオウンの領主の娘。
とある理由で《魔の大森林》の
奥に存在すると言われる
『幻の果実』を
探している。
サラ
コロネの相棒の「解体スライム」。
巨大な魔獣もすぐに解体しちゃう。
デリック
オリビアに雇われた冒険者の一人。
陽気で明るい、
パーティのムードメーカー。
大剣を武器に戦う
肉体派。
レイラ
オリビアに雇われた冒険者の一人。
いつも冷静沈着なクールビューティ。
剣と魔法を同時に操る
魔法剣士。
コロネ
異世界に転移したぽっちゃり女子。
カロリーを魔力に変えるスキル
『暴食の魔王』で、
絶品グルメを満喫しつつ、
異世界を冒険していく。
でも魔法を使いすぎると痩せて
しまうようで……。
ナターリャ
弓を武器に戦うエルフの少女。
魔素の流れを視ることが出来る。
穏やかな性格だが、
ちょっぴり気弱な
一面も。

第一章　異世界転移しちゃう、ぽっちゃり

ゆっさゆっさと一定のリズムで揺れる体。
その動きで、わたしはパチリと目を覚ました。
「……むにゃむにゃ。んん……ハッ！　もしかして寝ちゃってた!?」
いけないいけない！　いつの間にか眠っていたようだ。
もしかすると、もう晩ごはんの時間かもしれない。
とりあえず、起き上がって今何時か確認しないと――
ぐっ。
「……へっ？」
ぐっ、ぐっ……ぐぐっ！
「か、体が動かない!?」
ど、どうして!?
何度も起き上がろうとしてみるけど――ぬぐぐぐぅ～……ダメだ。
たしかに最近お腹周りが邪魔をして起き上がりにくい時はあったけど、さすがに寝たきり状態になるまでぽっちゃりが進行してはいないはず。

何が起こっているのか確かめるために寝たまま視線を下げてみると、そこには信じられない光景が広がっていた。
普段着として愛用している赤ジャージ。
その真っ赤なジャージの色が見えなくなるほど、全身が縄でぐるぐる巻きにされていたのだ！
「な、なんじゃこりゃあああああああああ!?」
ワッツ!?　いや、これどういう状況!?
なぜにわたし縛られてるの!?
全然状況が分からないけど、とにかくこの縄をほどかなきゃ。
でもわたしは身動きが取れない。なので、助けを呼ぼうと周囲を見渡してみると――
「……えっ？」
周りには、青々とした木々が生い茂っていた。
左を見たら木々、右を見ても木々、上を見たら澄んだ青空とお天道様。
香るのは森と土の匂い。それから少し鼻をつく獣臭……。
いやここ、完全に外じゃん!?
「ここって、も、森!?　わたし、こんな鬱蒼とした森に足を踏み入れた記憶なんてないよ!?　てか、んなことしたら死ぬよ!?」
部屋でゴロゴロしながらお菓子をつまんでジュースを流し込み、ご飯はご飯で三食しっかり完食するという日々を送ってきたのだ。

そんなボディで山登りなんてしようものなら、一瞬で両膝が爆発してゲームオーバーするに決まっている。
「それにさっきからずっとなんか動いてるんだけど。わたしこれ何に乗せられてんの？」
もう一つ気になるのは、この移動する乗り物だ。
冷静になってみれば、わたしの視線が不自然に高い位置にあることに気づく。
例えるなら大型トラックの荷台の上で仰向けに寝そべっている感じだろうか。
周囲も木の幹や葉っぱしか見えず、根っこの辺りは視界の遥か下にあるせいで全く確認できない。
クソー！　一体どこなんだここはー！
じたばたともがいてみるも、脱出はできず。
体を縄でぐるぐる巻きにされているけど、よく見るとその上からもう一回り太い縄が巻きついていた。
この太い縄でわたしを謎の乗り物にくくりつけているんだろう。
一体誰がなんの目的でこんな非道なことを……！
「あ、やっと起きた？」
どうにか抜け出せないか考えていると、急に横から幼い声が聞こえてきた。
「だ、誰ですか!?」
わたしはビックリして声の主へ顔を向ける。
思わず身構えたけど、そこにいたのはこんな山奥に似つかわしくない人物だった。

「え、女の子……？」
長い金髪を靡かせる可愛らしい女の子は、にこりと笑顔になる。
見た目はわたしよりも年下だけど、着ている服はとても高級そう。
上等な絹が使われてるみたいだ。
どこぞのご令嬢なのかな？　でもなんでご令嬢がこんな山奥に？
頭に色々な？マークを浮かべながら、わたしはふとこの子の足元を見た。裸足だ。
いや、それはまだいい。
こんな山奥にいるのに裸足だという時点で超おかしいんだけど、なんとかギリギリ見過ごせる。
一番の問題は、女の子の足が地面についていないことだった。
体から一気に血の気が引いていく。
「う、浮いてる!?　ぎゃあああああ！　わたしをさらった犯人はお化けだったの!?」
「あはは、体は大丈夫そうだね」
女の子は空中でくるりと回ると、わたしのお腹の真上に移動した。
ふよふよと浮いている。や、やっぱりお化けだぁ!!
「まずは自己紹介からいこうかな。私はこの世界の神さまをやってるフェリシア！　遠慮なく『フェリシアちゃん』って呼んでね！」
神さまはわたしを指差すと、アイドルのようなポージングでウインクをした。
どこからか、キラリーン☆、という効果音が聞こえてきそうな感じだ。

まあ可愛い。
可愛いけど、この子の爆弾発言がヤバすぎて可愛いさなんて吹っ飛んでいる。
今の自己紹介……聞き間違いじゃないよね？
「か、神さま……？」
「そうなのです！　わたしはこの世界を管理する神の一柱！　キミは、牧心寧ちゃんだよね？」
「えっ、どうしてわたしの名前を」
「そりゃあ私、神さまだもん！　そもそも心寧ちゃんをこの世界に招待したのは私だし」
この美少女神さま――フェリシア様は、得意気に腰に手を当てて答える。
わたしのフルネームを知っているということは神さまと判断して良い、のかな？
いやでも名前くらいなら調べれば分かるか？
それよりも、今サラッととんでもないこと言わなかった？
『この世界』だとか『招待』だとか。
……これってまさか、アレだったりする？
あのネット小説でよく見るアレだったりしちゃう？
わたしは恐る恐る確認してみた。
「あのぉ、もしかしてここって、異世界ってやつだったりします……？」
「うん！　そうだよ！　異世界も異世界！　ザ・異世界！」
やっぱりそうだよ！　異世界だよ！　異世界ファンタジーだよ!!

ホントに異世界とかあったんだね……。
中学生くらいからちょくちょくネット小説は嗜んでいたから、そういう展開に対する免疫はあるけどさ。
でも、どうしてわたしが異世界に来ることになったんだろう？
いやその前に、異世界に来てるってことは、現実世界のわたしは……!?
「あのー、どうしてわたしは異世界に？　ていうか、わたしって死んじゃったんですか!?」
「あれ、覚えてないの？　死因」
「えっ……は、はい」
死因とか、怖い言葉を可愛い声で言わないでよ。
もうちょっとオブラートに包んでほしいんだけど。故人の心に寄り添ってよね。
てか、やっぱり死んだんかい。
でも、死因と言われても何も思い浮かばない。
まさか、食べすぎによる高血圧で心筋梗塞とか脳卒中とか!?
わたしは二十歳の大学二年生だからピチピチのＪＤではあるけれど、そこらのＪＤよりも死亡リスクが高い自覚はある。
ぽっちゃりは背負うものが大きいのだ……！
「心寧ちゃんはね、あまりに一気にドカ食いしすぎたせいで、食べ物が喉に詰まって窒息死しちゃったんだよ。まあ、すぐに気を失っちゃったから、ほとんど苦しまなかったのは不幸中の幸いだね！」
フェリシア様は、可愛いウインクをしながら親指を立てる。
いや、人の死の状況をそんな楽しそうに話さないでくれるかな!?
もう一度言うけど、わたしが故人だっていう配慮を持ってほしいよ！
フェリシア様の死因解説にはショックを受けたけど……でも、だんだん思い出してきた。
「そ、そうだ。わたし、失恋したのをキッカケにダイエットを始めたんだけど長続きしなくて……。むしろダイエット期間中に食事を我慢していたストレスの反動で、ここ最近は手当たり次第に爆食いしてたんだった……！」
わたしは入学式の日から密かに気になっていた男子がいたんだけど、ある日その男子から大学の空き教室に呼び出しを受けた。
ドキドキしながらそこに向かうと、なんとその男子から告白してきたのだ。
舞い上がったわたしは全力で「お願いします！」って返事をしたけど、幸せなのはここまでだった。
わたしが交際ＯＫの返事をした直後に、近くに隠れていた数人の男子が出てきて、笑いながら罰ゲームであることを告げられた。
わたしが好きだった男子も、「普通にデブとか無理だから」と言って笑っていた。
もちろんぶちギレたわたしはその場の全員をボコボコにぶん殴って、後ほど先生に怒られた。
解せぬ。

でも、わたしだってショックで、悲しくて、悔しかったんだ。
だから見返してやろうとダイエットを決意した。
半年くらいは粘ったと思うけど、結果はこの通り。
人生初ダイエットだったから挫折やリバウンドは覚悟していたものの、まさかお亡くなりになってしまうとは……。
自分の事ながら予想外すぎて「何やってんのお前」とツッコミたくなるね。
いや、ほんとに何やってんだわたしは……！
事の顛末を思い出して落ち込んでいると、フェリシア様が神妙な面持ちで語り始めた。
「罰ゲームとして弄ばれて、失恋して、ダイエットまで頑張った直後に、食べすぎで喉つまらせて死んじゃうなんてちょっと可哀想じゃない？　だから私が、心寧ちゃんに第二の生をプレゼントしようと思ったわけなのです！」
「あぁ、そ、そうだったんですね。ありがとうございます？」
フェリシア様に困惑交じりの感謝をしていると、不意に下から声が聞こえきた。
ギィー、ギィー！　といった、動物の鳴き声のような……叫び声？
「あ、そろそろ着くみたいだね」
「着くって、どこにですか？」
「え？　ゴブリンキングの巣」
「へ？」

わたしは固まった。今フェリシア様はなんと言ったのかな？
『ゴブリンキングの巣』とかなんとか聞こえたんだけど……。
「わ、わたし、ゴブリンに捕らえられているんですか!?」
「いやぁ～、この世界に招いたはいいものの、心寧ちゃんが中々起きなかったからその間にゴブリンの群れに見つかっちゃったんだよね。それでゴブリンたちに縄で縛られて、ただいま絶賛連れ去られ中ってわけ！」
「絶賛連れ去られ中っ!?」
「このまま起きなかったらどうしようかと思ったけど、ギリギリ目覚めたようで良かった良かった！」
「いやゴブリンがわたしに近づいてきた段階で助けてくださいよ！　なに呑気にゴブリンの動向を見守ってるんですか!?」
異世界とか神さまとかインパクト満載の話で忘れていたけど、わたしはずっと仰向けで縛られている状態だ。
この縄はゴブリンの仕業だったの!?
そしてこのままだとゴブリンキングとやらに美味しく召し上がられちゃうのか!?
それにわたしを運んでるのも明らかに地球の乗り物じゃないし、まさか異世界産のドデカイ魔物とかなんじゃ……！
「ちょ、ちょっと！　助けてくださいって神さま！」

「助けてあげたいのは山々だけど、あんまり世界に干渉し過ぎるのはダメなんだよねぇ。ただでさえ、心寧ちゃんをこの世界に招待したばっかりだし。まあ心配しなくても、この程度の魔物くらいなら心寧ちゃんでも倒せるよ。楽勝楽勝！」

「た、倒すってどうやってですか⁉　わたし、武道とか習ったことないし、そもそも運動自体苦手なのに……」

「大丈夫だって。そんなこともあろうかと、私がとーっておきのスキルを与えておいたから！　ドカーンって魔法とか撃てちゃうよ？　カッコいいよね！」

さすがは異世界。やっぱり魔法なんてものがあるのか。

いや、だからといってわたし魔法なんて使ったことないんですけど。

「そ、その魔法はどうやって発動させればいいんですか？」

「う～ん、なんとなく魔力を集中させて、イメージ通りに放てばいいよ。それで大体上手くいくから。まあ、強いて言うなら魔法の名前とか叫ぶとイメージが捗るかもね！」

説明が雑すぎる！　もっと具体的な手順とかアドバイスが欲しいんだけど⁉

「そんじゃあ、言うこと言ったし、私は帰るね！　そろそろ脱出しないとゴブリンキングにボリボリ食べられちゃうから気をつけて！」

「え、あの、食べられるって本当に――」

「あ、あとこれは私からの餞別だよ！　きっと心寧ちゃんの役に立つと思うから仲良くしてあげてね！　それじゃあ、グッドラック‼」

「ち、ちょっとフェリシア様⁉」

早口で言いたいことだけ言い終えると、神さまは光に包まれて消えていった。

目の前の光が収束すると同時、両手に乗るくらいの大きさのしずくみたいなのが、ぽよんとお腹に落ちてきた。

それは綺麗な水色で、ぽよぽよと小さく揺れている。

ま、まさかこの魔物は……！

「これ、もしかして――スライム？」

「ぷるん！」

いや、魔物増やされただけじゃん！　結局わたし、どうすればいいの⁉

「ちくしょー！　呑気に異世界に浸ってる場合じゃない！　まずはさっさとここから脱出しないと！」

さっきフェリシア様が消える直前に、脱出しないとゴブリンキングに食べられる、とか言ってたよね？

つまり、ゴブリンキングはわたしを餌として認識してるってことだ。

そしてわたしは、ゴブリンキングがいる巣に向けて運搬されている真っ最中。

だったら、なんとしても巣に到着する前にここから脱出する必要がある。

わたしは耳を澄ませて、下から聞こえてくるゴブリンの鳴き声を探ってみた。

ギィー、ギィー、と気味の悪い鳴き声がそこら中から聞こえてくる。

「うーん、結構な数がいるなぁ。多分、二〇体以上はいそうな感じだね」
わたしがこれまで読み漁ってきたネット小説の知識に照らし合わせて考えれば、ゴブリンは雑魚モンスターのイメージがある。
だけど、二〇体以上もの数を同時に相手してどれくらい勝算があるものなんだろうか。
異世界系のチート主人公たちは軽くぶっ飛ばしてたけど、参考になる？
うん。考えてみたけど、わたし一人では勝てる気がしない。
雑魚とはいえ、ゴブリンも立派なモンスターだ。
それに何より、わたしはダッシュで逃走することができない。
スタミナがないからすぐに捕獲されるだろうし。
そこでわたしは、お腹に乗っているスライムを見た。
ぷるぷると静かに揺れている。
このスライムはフェリシア様が餞別としてくれたものだし、もしかしてめっちゃ強い魔物なんじゃない⁉
スライムが最強キャラになったり、無双したりする作品も見たことあるし！
「えっと、あなたはわたしの味方なんだよね？　この縄ほどける？」
「ぷるん？」
スライムはぷるるんと震えた。
……しばらく待ってみても何も起こらない。

もしかしてこのスライムって攻撃力ないの？　本当に雑魚モンスターなの⁉
フォルムは可愛いから癒されるけどさ！
くそぅ。やっぱり、わたしが魔法を使って自力で逃げ出さないとダメなのか……!!
「えっと、たしか魔力を集中させるんだっけ？　やるだけやってみるか。魔力……魔力……むむむ」
わたしは『魔力』というものに頑張って意識を向けてみる。
言われてみればだけど、なんだかお腹のあたりに違和感というか……エネルギーが流れているような気がする。
これが魔力ってことなのかな？　単にお腹減ってるだけじゃないよね？
わたしはこのお腹のエネルギーを魔力だと信じて、次に魔法のイメージ作業に移る。
「まずはわたしを縛ってる縄をどうにかしないと。縄を切るにはなんの魔法が良いんだろう？　火……だとわたしまで燃えそうだし、水……は今は意味ないよね。だったら……風？」
アニメで風の刃や斬撃を飛ばしているシーンを見たことがある。
あれをイメージして、再現できないかな？
わたしはお腹の魔力っぽいものを意識しながら、縛られている縄が切れるようにイメージする。
「出てこい、風の刃！」
その瞬間、わたしの周囲に薄い緑色の風が吹き込んだ。
シュバッ！

パラパラパラ……。
お腹を縛っていた縄がバラバラに千切れる。
「おおお！　やった、成功だー！」
なるほど、こういう感じで魔法を発動するのか。なんとなく分かった気がするぞ！
「それじゃあ慎重に起き上がって、と……」
わたしはゆっくりと上半身を起こし、キョロキョロと周りを確認する。
やっぱり緑の木々が目に入るから、森にいるのは間違いないみたい。
「でも、目線が高いのが気になるなぁ……。それに、なんかわたしが乗ってるのも毛がふさふさしてるよね」
わたしは自分が乗っかってるものを見た。
茶色の毛が全体に生えていて、まるで生き物が歩いているかのようにゆっさゆっさと揺れている。
うわぁ、これってやっぱり……。
わたしはゆっくりとその場に立ち上がり、より高い目線から確認してみた。
そして、わたしは驚愕の光景に目を見開く。
「やっぱり、これってめちゃくちゃおっきな動物じゃん！　いやこの場合、魔物ってやつ!?」
わたしがマンモスのような魔物にビックリしていると、下にいるゴブリンたちが急にわたしを指差して騒ぎ始めた。
「ギギィ!?　ギィー！　ギィー!!」

しまった！　あまりにビックリしすぎてつい叫んじゃったよ！
「や、やばい！　こっそり逃げようと思ってたのに、その前にバレちゃった!?」
わたしがパニックになってオロオロしていると、後ろにいるゴブリンが弓を引いていた。
さらにその横のゴブリンは、大きな杖をわたしに向けている。
ち、ちょちょちょ、まさか矢とか魔法を撃ってくるつもり!?
そう予想した瞬間、勢いよく矢が放たれた。
慌てて頭を下げて、なんとか回避する。
「あ、あぶなぁっ!?」
わたしは頭を両手で守りながら、情けなく這いつくばる。
その真上を四方から何本もの矢がビュンビュン通過していく。
「ひえぇぇぇ。異世界のゴブリンめっちゃ怖いんだけど！　ゴブリンは雑魚モンスターとか言ったの誰!?　リアルじゃ勝ち目ないってこれ!!」
驚くのもつかの間、わたしは嫌な予感がした。
さっきわたしが風魔法で縄を切り刻んだ時のような、魔力の流れっぽいものを感じる。
わたしは恐る恐るマンモス魔物（仮称）の体から頭を出してゴブリンの様子を窺ってみた。
そこにいたのは、さっきわたしに杖を向けていたゴブリン。
その杖の先端には、魔力のような真っ赤な光がみなぎっていた。
「うわあああああっ！　ま、まさか炎の魔法!?」

あれはヤバイ！
火炎放射みたいな範囲攻撃を食らったら避けられない！
わたしは逃げるために急いで魔法タイプのゴブリンから距離を取る。
マンモス魔物の背中を這いながら、少しでも炎魔法の攻撃から逃れるために反対側へ移動しようとして、
「――へっ？」
ずるり、と足を踏み外してしまう。
あ、オワタ。
「うわぁぁあああああああ!!」
一瞬の浮遊感を体験した後、お尻からまっ逆さまに落下していく。
そ、そんな！
まだ異世界で目を覚まして数分しか経っていないっていうのに、もうゲームオーバーなのかぁ！
死を覚悟した瞬間、お尻から衝撃が駆け抜けた。
「あだぁっ!!」
地面に衝突し、反射的に声が出る。
うう、わたしもここまでか。このまま意識を失ってしまう……ことはなかった。
「あ、あれ？　反射的に痛いって叫んじゃったけど……思ったより痛くない？」
基本的に数メートルの高さから落下したらただでは済まない。

しかも足からではなくお尻から。さらにわたしはぽっちゃりボディときている。
普通なら全身の骨が砕け散るくらいの大ケガをするのは必至だ。
もしかして、これも神さまがくれた特殊能力なのかな？
スキル『完全防御』！　みたいな？
「グモォオオオオオ!!」
あまり痛みはないものの一応お尻をさすって労っていると、突如目の前でマンモスくらい大きな魔物が暴れだした！
見た目からして、巨大な猪っぽい。口から大きな牙が突き出ている。
どうやらゴブリンたちの無遠慮な攻撃が、この猪を刺激してしまったようだ。
お前ら、何してくれとんねん！
「ギィー！　ギィー！」
「ギッ、ギッ」
「ギィッ！　ギギャー!!」
巨大な猪が暴れだしたことによって、一気にゴブリンの群れがカオス状態になる。
猪を静めるためか、わたしを捕らえるためか、ゴブリンは四方八方に矢や魔法を放ち始めた。
一部の攻撃はもはやわたしじゃなくて猪の方に命中しちゃってるよ。
それにより、猪の怒りのボルテージがどんどん高まっている気がする。
ちょ、これヤバいって!!

「今から走ってもすぐに追い付かれそうだし、魔法で凌ぐしかないか!?　ええい！　悠長に考えている暇はない！　お腹の魔力を意識して、イメージは……わたしを守ってくれるバリア！」
バリア魔法をイメージすると、わたしの周囲にドーム状の光の膜のようなものが現れた。
直後、外側から矢が迫ったり火の球が直撃したりするが、このバリアはビクともしない。
そういえばフェリシア様は魔法を発動する際にその魔法の名前を叫べばイメージが捗るとアドバイスをくれていた。
今回は無意識にだけど『バリア』という魔法名を叫んだことでよりイメージが補強され、強化された魔法が発動してくれたのかな？
これからは魔法を発動する時は魔法の名前も口に出した方が良さそうだ。
「よ、よし！　何はともあれ、これならしばらく安全そうだね。……はっ！　そういやさっきのスライムは――」
「ぷるん？」
神さまが最後にくれたあのスライムの姿が見えないと思ったら、わたしの肩からにゅるんと這い出てきた。
もしかして、ずっとわたしの後ろに張り付いて退避していたのかな？
「あ、そこにいたんだね。はぐれちゃったのかと思って心配したよ。急に色々と襲われちゃったけど、ケガとかしてない？」
「ぷるん！」

スライムはびよんと伸びて答える。
「大丈夫だよ！」って言ってるような気がした。
無事なら良かったよ。
「さて、こっからどうしようかな」
わたしは光のバリアに守られながら、難しい表情で腕を組む。
身の安全が保証されたなら、次の問題はどうやってこの窮地から脱するかである。
ちなみに、今もドカドカと矢やら魔法やらが撃ち込まれているよ。
でもバリアはびくともしない。
この安心感のおかげで冷静に思考を巡らせることができる一方で、バリアを解除した瞬間わたしがズタボロにやられる未来しか見えないのが難点だ。
こうなったら、こっちから攻撃して追い払うしかないんだけど――
「さっきわたしの縄を切り裂いたみたいに、風の刃でも撃ってみる？　でも、ゴブリンのバラバラ死体は見たくないしな……。かといって炎で丸焼きにするのもなぁ。丸焦げの死体も見たくないし……」
わたしはちょっとぽっちゃりしてるだけの普通の二十歳の大学生だからね。
さすがに魔物の残酷な死体を見るのは精神衛生上ご遠慮したい。
「あ、だったら気絶させるのはどうかな？　気絶といったら、電撃魔法とか？」
これなら魔物のグロテスクな死体を見なくて済むよね！

仮に魔物が絶命したとしても、感電死ならショッキングな姿にはなりにくいはず。
そうと決まれば善は急げだ。
まずは実験として、人差し指の先端に意識を集中させて電撃のイメージをしてみた。
すると、指先にバチバチと電気がほとばしる。
これは、もしかしたらいけるかな？
「ものは試しだ！　いけっ――サンダーボルト！」
わたしは指先を近くのゴブリンに向けて、今度は気絶させるイメージで強めの電撃を飛ばす。
すると、指先から電撃が一直線にゴブリンに走っていって――
「ギギャ!?」
電撃はバリアをすり抜けて、近くにいたゴブリンに命中した。
電撃を食らったゴブリンは感電し、やがて気を失って倒れる。
だけど、よく見るとピクピクと動いているからまだ生きてるっぽい。どうやら成功したみたいだ。
「やった！　これなら無闇に殺さずにこの状況を抜け出せるかも！」
なんとなく電撃系のイメージで『サンダーボルト』なんて魔法の名前を叫んでみたけど、イメージしやすくなったから良かった。
よし、それじゃあこの調子で周辺の魔物を気絶させてこの窮地を切り抜けるとするか！
わたしがそう決意した瞬間、ひときわ大きな獣の叫びが轟いた。
「グモォオオオオオオオオオオ!!」

それは、先ほどまでわたしが縛られて乗せられていた巨大な猪の魔物の雄叫びだった。
その魔物は、わたしにひどくご立腹のようで、砂埃を巻き上げながら迫り来る。
「え、え、ちょ、ちょっと待って！　さすがにそんな現実離れした巨大猪の突進は想定外で――！」
わたしの制止も虚しく猪はバリアに衝突。
その瞬間、ドガアアアアアン!!　と、轟音が鳴り響いた。
バリアに守られていたわたしでさえ、思わずぶっ飛びそうになるほどの衝撃と地響きを食らってしまう。
「おわぁっ!?　さ、さすがに攻撃力がゴブリンの比じゃないね。ひとまずバリアが壊れなくて良かったけど……この大ボスを倒さないと前には進めない！」
巨大猪は、ブルブルと頭を揺らしながら少しずつ後退する。
一撃でわたしのバリアを破壊できなかったことでさらに怒りを募らせているようだ。
多分、距離を取ってからまた突進してくるんだろうね。
だけど、このまま突進攻撃を許していたらいつかバリアが破壊されるかもしれない。
仮に破壊されなくとも、こんな至近距離から巨大な猪が襲いかかってくる体験を何度もするのは心臓に悪すぎる。
なのでわたしは、たった今ゴブリンで実証した電撃魔法でこの巨大猪を気絶させてやろうと決意する。
「食らえ、サンダーボルト！」

わたしの指先から、電撃がほとばしる。
その電撃は猪の頭に命中したものの、巨体を一瞬停止させただけだった。
猪はすぐに復活し、突進してくる。
「うそ！　効いてない!?」
ドガァァァアアアン!!　と、二度目の突進攻撃に踏ん張って耐える。
バリアの無事を確認しつつ、思考を巡らせた。
今のサンダーボルトはゴブリン用に放った電撃と同じイメージで撃ったから、威力が足りないのかもしれない。
よく考えれば、ゴブリンよりも格段に大きい魔物にはそれに応じた電撃の強さが必要だろう。
「それなら、これでどうだ！　サンダーボルトッ!!」
わたしは右の手を開いて猪に向け、手のひら全体を使って強力な電撃を撃ち放った。
バヂバヂバヂバヂィッ!!　と青白い火花が散るほどの威力。
それも一回で終わりじゃない。強化版の電撃を、数秒間放ち続ける。
「グモ……モゴオオォォ……」
やがて、猪が力なく倒れた。
ズシィン……と地面が揺れた後、横たわった猪は動かなくなる。
一時は電撃魔法をはね除けようと抵抗してきたから焦ったけど、最後はわたしの勝利に終わった。
やっぱり電撃を浴びせ続けたのが良かったようだ。

「グギッ……！」
「ギギャア！」
「ギャギキ……ッ!!」
周囲に蔓延る生き残ったゴブリンたちに目を向ける。
ゴブリンたちはついさっきまでしこたま魔法や矢で攻撃してきたというのに、今はその気配がない。
むしろわたしを恐れるように後ずさっていた。
もしかすると、この巨大猪が倒されたのを見て、怖じ気づいたのかもしれない。
だったら、もうちょっとビビらせたらどっか行ってくれるかな。
わたしは頑張って怖そうな表情を作り、周りを取り囲むゴブリンたちに宣言する。
「ほら、どうする？　わたしはまだまだ戦ってもいいけど。やられる覚悟ができた奴からかかってきなよ！」
バヂバヂィッとわたしは手の上で電撃をはじけさせる。撃ち込む気はなく、あくまで威嚇だ。
「！　ギギィー！」
「！　ギギャアー！」
「！　グギャァー!!」
こんな思い付きの方法で上手くいくかは不安だったけど、ゴブリンたちは大慌てで逃げていった。
蜘蛛の子を散らすように去っていき、辺りは一気に静かになる。

「……ほっ。威嚇作戦、上手くいって良かった～」
あんな数のゴブリンに電撃を撃ってたらめんどくさすぎるからね。
あ、でももしかしたら、電撃の広範囲攻撃とかできたら楽かも？
また後でこの電撃魔法に関しては色々と試してみることにしよう。
何はともあれ、平和的に片付いて良かったよ。
わたしは念のためもう一度周囲の安全を確認してから、ゆっくりとバリアを解除した。
光の膜が、空気に溶けるように消えていく。
「ふぅ～。なんとか命は助かったね」
「ぷるるん！」
ほんの数分の出来事だったけど、なんかどっと疲れた気分だ。
足元で揺れているスライムも、きっと同じ気持ちのはず。そうだよね？
「……ん？　ていうか、何か服がダボついてるような。それに体もかなり痩せてない？」
自分の体に違和感を覚え、ほっぺやお腹をべたべたと触ってみる。
鏡がないから全身の姿をはっきりと確認できないけど、やっぱりいつもよりも重量感が足りない気がした。
まるで体の脂肪を絞り上げられて、超減量に成功したような感覚だ。
「まあでも、いきなり脂肪が消えてなくなるなんてこと起こるわけないし、気のせいかな？　そんなことよりこれからどうするか考えないとだよね！」

一難去ったものの、まだまだ前途多難である。
ここがどんな世界なのか分からないし、魔法の知識や扱いも曖昧だし、なによりまだ人間と出会っていない。
加えて倒したとはいえ巨大猪の横で長時間居座るのも怖いから、早いとこ近くの村や街で身を落ち着けたいところだ。
「フェリシア様は生きる使命みたいなものは言ってこなかったし、わたしの好きに行動していいってことだよね？　うーん、それならとりあえず近くの街を探しに――」
ぐぅ～～～～！
巡らせていた思考は、その音によってかき消された。
やばい……めちゃくちゃお腹すいた!!
まるで六時間くらい何も口に入れなかったような空腹感で、まともに考えることなんかできない!!
「い、今にもお腹と背中がくっつきそう……！　やっぱりお腹もいつもよりぺったんこになっている気がするし……なにか、なにか食べ物は……!!」
くっ、ここは山の中だ。
周辺を見回しても、食べられそうなものはない。
探せば木の実やキノコなどは生えているかもしれないけど、そんなチャチな食材で満たされるような空腹感ではないのだ！

なにか、もっとガツンとお腹に溜まるパンチのある食べ物はないのか!?
「……ん？」
そこでわたしは、ふと目の前の巨体に目がとまる。
ゾウを上回るほどの大きな体。
でっぷりと詰まった筋肉質な肉体……お肉。
「――このでっかい猪、食べられるかな？」

第二章　骨付き巨大肉にかぶりついちゃう、ぽっちゃり

ぽっちゃりにとって空腹とは死と同義。
これを踏まえた上で、もう一度わたしが置かれた現状を宣言しよう。
わたしは今、過去最大級に死にかけている!!
それに応えるように、お腹の虫がぐるるる～～！　と鳴った。
早くご飯を食べさせろとお腹の中で暴れている。
ぶっちゃけ空腹に比べれば先ほどのゴブリンと巨大猪の猛攻なんて可愛いもんだ。
それにさっきも思ったけど、やっぱり体が細くなっている気がする。これは非常にマズイ状態。
何かパンチのある食べ物はないかと考えを巡らせた結果、それを打開する妙案を思いついてし

まった。
「――このでっかい猪、食べられるかな？」
猪の肉は一度食べたことがあるけど、とても美味しかった記憶がある。
ごくり、と生唾を呑み込んだ。
思わず巨大猪に手が伸びるが、ここで問題が一つ。
動物のお肉を食べるには、解体をしないといけない。
「ぐっ、な、なんという難題だ……！　魚くらいなら捌けるけど、さすがに猪の解体はしたことがない！」
まして、こんな規格外の大きさの猪なんてもってのほかだ。そもそもグロいのは苦手だし。
くそぅ！　お肉は目の前に転がってるのに！
わたしは指をくわえて見ていることしかできないのかっ⁉
「ぷるん！」
しくしくと悲しみに暮れていると、スライムがわたしの前に出てきてぷるんと揺れた。
「え、ど、どうしたの？」
「ぷるるん！」
「……もしかして、自分に任せろ、って言ってるの？」
「ぷるっ！」
スライムは、そうだよ！　と言うように大きく跳ねた。

するとスライムは巨大猪の傍にぽよんぽよんと移動していく。
どうするつもりなんだろう？
わたしがスライムの行動を不思議に思って眺めていた、次の瞬間。
「ぷるぅぅぅううううん!!」
なんと、スライムが一瞬にして巨大化した！
そして漁師が海に網を放つような感じで、覆い被さるように猪の巨体を包み込む。
「す、すごい！　大きな猪を一気に丸呑みした⁉」
しばらくの間、猪を丸呑みした状態でもごもごと咀嚼するように動くと、スライムはみるみる内に小さくなっていく。
最終的に両手に乗るくらいのサイズにまで小さくなり、ぽよんぽよんとわたしの方へ戻ってきた。
「ぷるぅ～！」
「い、一瞬で猪を呑み込むなんてすごいね！　もしかして食べちゃったのかな…………あれ？」
ていうかこれ、スライムに猪を食われただけでは？
ぐぅぅ～～～～～～～～～……!!
残酷な真実に気づいたわたしのお腹は、さっきよりもデカい音でキレている。
期待していた猪肉も、このスライムのお腹に収まってしまった。
うぅ、わたしの食べ物が何もない……。
「ぷるん！」

涙を流しながらパタリと倒れるわたしに、スライムがぷるんと震える。
どうしたんだろうと思って目を向けると、なんとスライムの中からなにかがわたしの方へ飛んできた。
放物線を描くように投げ出された謎の物体を、反射的にキャッチ。
「うわっ！　い、いきなりなに、これ――」
キャッチしたモノを見て、目を丸くする。
わたしの手にあったのは、かなり大きな骨付きの生肉だった。
外側に出っ張った骨の部分を握ってつかんでいる状態。
お肉の部分はバスケットボールくらいの大きさがあって、非常にボリューミーだ。
「な、なんで突然生肉が……!?　てか、これは一体なんの肉なの？」
疑問に思うと、わたしの持つ骨付き肉の上にテキストがポップアップした。

【ギガントボアの生肉】
大型の魔物の生肉。肉は非常にジューシーで、とても美味。市場では流通量が少ないため高級品として取引される。

おお、なにこれ！　もしかして『鑑定』ってやつ？
ネット小説じゃ定番スキルの一つだ。

このスキルも、フェリシア様がわたしにくれたものなのかな。
とにもかくにも、この鑑定スキルは非常に便利だ。
「ギガントボアの生肉、か。ギガントボアっていうのは、さっきの巨大猪のことかな？　いや、それよりもこのお肉の説明にジューシーでとても美味ってあるのがめちゃめちゃ気になる……!!」
じゅるり、と涎が垂れるのを我慢していると、こちらを見上げているスライムの存在に気づいた。
「えっと、このお肉もらっていいの？」
「ぷるん！」
わたしが足元のスライムに尋ねると、スライムはぽよんと跳ねた。
オッケーってことでいいんだよね？
ホントに食べちゃうよ？　今さらやっぱりダメって言っても遅いからね？
「お肉をくれてありがとう！　あっ、でもこれ生肉だよね。焼かないといけないけど、そんな調理用の器具とか持ってないしな……」
いくらお腹が減りまくってるわたしでも、さすがに生肉を食す度胸はない。
だから火を通すのは必須なんだけど、そのような調理器具がなかった。
まあ骨付き肉だから焚き火して炙ってもいいけど、これだけ肉が分厚いと中まで火を通すのに時間がかかりそう。
生憎だが、わたしのお腹にそんな猶予はない。
一分一秒を争う事態なのだ！

とはいえ、どうしたものか。
木を材料にして、簡易的な調理器具でも作る？
いやいや、今のわたしにそんな気力も体力もない。
そもそもＤＩＹなんてやったことないし、上手くできるとは思えない。
「……あ、だったら魔法で代用したらいいんじゃない!?」
そうだ、この世界にはかくも便利な『魔法』という概念がある。
さっきの電撃魔法の要領でいい感じの炎魔法でも出せれば、このまま肉を炙って食べられるかもしれない！
というわけで早速実行。
わたしは右手で骨付き肉の骨をつかみ、左手を生肉の横へ移動させる。
「えーと、あんまり火力が強すぎると危ないから、ちょうどお肉が美味しく焼けるくらいの火加減で……ファイア！」
わたしは左手から炎が出るように魔法をイメージする。
すると、ボワッ！　と赤い炎が肉を呑み込み、全面をじゅうじゅうと焼き始めた。
「おおっ、できた！　あとは火加減を見極めて……ここでストップ！」
しばらく炎魔法で肉を焼いてから、絶妙なタイミングで魔法をとめる。
炎の中から出てきたのは、こんがり焼けた美味しそうなお肉だった。
いい感じに肉汁もしたたっていて、香ばしい匂いが食欲を刺激する。

わたしは溢れる涎を抑えながら、目の前のこんがり骨付き肉に瞳をギラつかせた。
「ふぉおおおお！　な、なんて美味しそうなんだ！　これはもう我慢できない！　いっただきまーす――がぶっ!!」
うまぁあああああああああああああ!?
豪快にかぶりついた瞬間、肉汁が口の中いっぱいに弾けてめちゃくちゃジューシー！
肉はちょっと硬めだけど全く獣臭さとかはないし、むしろワイルドに肉を食ってる！　って感じがたまらない！
「う、美味すぎる！　何も味付けとかしてないのに、お肉自体に塩気があるから食欲が加速するし、お肉も分厚くてパンチがすごい！　ただ素焼きしただけなのに、この美味しさは犯罪級でしょ!?」
わたしはバクバクと夢中になって肉に食らいつく。
この豪快な食べ心地がまたたまらない。
我ながら、原始人顔負けの食いつきだと思う。
女子としての恥じらいはないのかと呆れられそうだけど、ぽっちゃりとは花より団子を地で行く種族！
わたしは欲に正直な女なのだ！
「もぐもぐ……ごっくん！　あぁ、もう終わりか。最初は大きいお肉だと思ったけど、食べ始めたら一瞬でなくなっちゃったな」
お肉を食べ尽くして、残った一本の骨を見つめる。

めちゃくちゃ美味しかったけど、はっきり言って全然足りない。
今のわたしはハングリーモードなのだ。
バスケットボール大のお肉一つでは、到底その空腹はまかないきれない！
だけど、もうお肉はない。スライムがくれたお肉はこの一つだけ。
しょんぼりと悲愴感を漂わせていると、スライムが何かを主張するようにぽよんぽよんと跳ねた。
「ぷるん！　ぷるん！」
「あれ、どうかしたの？」
「ぷるるん！」
わたしがスライムの方へ目を向けると、スライムはぐぐっ、と凹み始めた。
おや、まさかこれは……!?
脳裏に浮かんだ理想を叶えるように、スライムから新たな骨付き肉が飛び出てきた。
わたしは待ってましたと言わんばかりに、すかさずキャッチする。
「こ、これはさっきのお肉！　キミ、まだ出せたんだね！　これもわたしにくれるの？」
「ぷるん！」
スライムは肯定するように鳴くと今度は、ぽぽぽん！　と数個の骨付き肉が大量に放出された。
「わわわ！　こんなに!?」
わたしは空中に舞うお肉を抱き抱えるように全てキャッチした。
今のわたしの腕の中には、多くの骨付き肉がぎゅうぎゅうに詰まっている。

なんと素晴らしい光景か！
「キミ、すごい魔物なんだね！　こんなにお肉をくれてありがとう！」
「ぷるるん！」
わたしが大はしゃぎで褒めると、スライムは嬉しそうにぽよんと跳ねた。
なんだか、まだまだいけるよ！　と言ってそうな気もする。
もしかして、さっきのギガントボアのお肉を全部くれるつもりなのかな？
もしそうなら最高すぎる！　パッと見でも相当な量のお肉が取れるだろうし！
「よーし！　それじゃあ、じゃんじゃんお肉を焼いて焼いて、食べまくるぞー!!」
「ぷるーん!!」
わたしの掛け声に答えるように、スライムは今日一番のジャンプを披露してくれた。

○　○　○

スライムからもらった大量のお肉を焼いて食べまくった。
思うがままに食欲を満たしまくったわたしが今どうなっているか、結論から言おう。
かーなり食べ過ぎた!!
わたしは森の真ん中で大の字に寝そべっている。お腹は、でん、とパンパンに膨らんでいた。
さっきは細くなったと思った体も、もうすっかりいつも通りである。

「うぅ、ぐ、苦しい。もう食べられない……けぷっ」
わたしの横には、大きな骨が山のように積み重なっている。わたしが食べた残骸だ。
骨付き肉を無我夢中で食べまくっていると、いつの間にかこうなっていた。
さすがは異世界。味も量も現実離れしたお肉だったよ……！
「ぷるぅん」
スライムが、大丈夫？　と心配そうに傍に寄ってくれる。
「だ、大丈夫だよ。休んだら治るから。ちょっとだけ安静にさせて」
「ぷるん」
スライムは理解したように小さく震えた。だけど、今のわたしは無防備極まりない状態だ。
一応、周囲にバリア魔法を展開しておこう。これなら突然襲われたりしてもなんとかなるはず。
一息ついて休んでいると、目の前にブォンとウィンドウ画面が表示された。
『解体スライムがテイム可能になりました。テイムしますか？　ＹＥＳ／ＮＯ』
「え、なにこれ」
なんか急に出てきたんだけど。
そういえばこういう定型文のウィンドウみたいなのも異世界ファンタジーの小説だとよく見るよね。
前世で一通りネット小説を漁っていたからか、こっち系のリテラシーは人並み以上に高いのだ。
わたしはもう一度現れた文章を読んでみる。

「えっと、テイムってモンスターとかを従わせるってことだよね？　解体スライムって出てるけど、これはキミのこと？」
「ぷるん！」
そうだよ！　と言うようにスライムがぽよんと跳ねた。
つまり、このスライムがわたしと従魔契約みたいなものを結ぶのを了承してくれたってことか。
テイムってどんなことするのか分からないけど、まあこのスライムがしてもいいっていうなら断ることもないかな？
少し考えた後、『ＹＥＳ』と書かれた文字に触れる。
その瞬間、わたしとスライムが同時にパアアァッと淡い光に包まれた。
「おお、なんか体がジンジンする！」
しばらく淡い光に包まれていると、やがて光が消えていく。これでテイムはできたのかな？
疑問に思っていると、それに答えるようにウィンドウ画面が切り替わった。
『テイムに成功しました。任意の名前をつけて下さい』
大地に寝そべるわたしの顔の横で、スライムがぽよんと跳ねた。
わたしの名付けを待っているみたいだ。
「名前か。名前は大事だもんね。うーん、そうだなぁ……」
わたしは仰向けで寝転んだまま、顎に手を当てて考える。
スライムだから、スラちゃんとか？　いや、これはちょっとそのまんますぎるよね。

なんかもうちょっとオリジナリティーを出したい。
どうせなら少しわたしらしさも匂わせるネーミングにしたいところだ。
スライムという種族にとらわれず、この子の特徴から考えてみよう。
ちっちゃくて可愛い、ぽよんぽよん跳ねる、それから魔物を取り込んで手軽にお肉にしてくれる。
動物の解体ができないわたしにとって、この子は絶対に必要な存在だ。
この子がいなかったらわたしは何も食べられなくなるかもしれないし、実際このギガントボアのお肉を食べることはできなかった。
つまり、このスライムはわたしにとって必要不可欠な相棒――パートナーなのだ。
お肉……料理……料理の必需品。
わたしの頭の中でパチッとピースが繋がった。
「――サラ。キミの名前は、サラだ！」
わたしが名前をつけた瞬間、スライム――サラが輝きを強める。
「ぷるるぅん！」
輝きながら、サラはぴょーんと大きく跳ねた。喜びの感情が伝わってくる。
「名前、気に入ってくれたかな？」
「ぷるん！」
「それは良かった！　これからよろしくね、サラ！」
「ぷるぅん！」

ぽよぽよ跳ねて寄ってくるサラを、なでなでする。めっちゃ可愛い。
テイムしたからか、さっきよりもサラの気持ちがダイレクトに心に伝わってくるような気がする。
サラの感情に影響されて、わたしの心もハッピーな気持ちになっていった。
いやー、それにしても名前を気に入ってもらえて良かったよ。
料理には絶対に必要な『お皿』からインスピレーションを得て、サラと名付けたんだけどね。
おっと、これは全く安直じゃないよ？
スライムという種族から、サラの特性、そしてわたしの料理に欠かせない存在、という風に頑張って想像力を膨らませた素敵な名前なんだから！
「そういえば、サラのステータスとかはどうなってるんだろう。見れるのかな？」
そう口に出したら、わたしの目の前にステータス画面が現れた。

【名前】　サラ
【種族】　解体スライム
【危険度】　F
【スキル】　簡易解体、簡易加工、簡易組立、簡易分解

おお、見たことある感じのステータス画面だ！　一体どんな内容なんだろう！
「ふむふむ。サラは『解体スライム』っていう種族なんだ。だから魔物のお肉をあんなに綺麗に解

体することができたんだね」
あのマンガやアニメで見るような骨付き肉は感動した。
スキルにも『簡易解体』っていうのがあるし、これを使ってギガントボアを解体してくれたのかな？
「てか、サラのステータスが見れたなら、もしかしてわたしのステータスも見れたりするのかな？」
サラのが見れたんだから、多分わたしのも見れるよね？
自分のステータスが表示されるよう念じて、寝ころんだ状態であの有名セリフを叫んだ。
「ステータスオープン！」
ブォン！　という音と共に、目の前にわたしのステータス画面が現れる。

【名前】　牧心寧（まきころね）
【種族】　人間
【固有スキル】暴食の魔王（サタン・カロリー）
【スキル】　アイテムボックス、マシュマロボディ、食の鑑定（しょくのかんてい）（ＮＥＷ！）
【従魔】　サラ〈解体スライム〉

「おお、出た出た！　え～と、なになに……」
わたしは自分のステータスを眺める。

かなりシンプルなステータス画面なので、見やすくて助かるよ。
ざっとステータス全体に目を通した後、わたしは見逃すことができない一文を凝視（ぎょうし）した。
「固有スキル、『暴食の魔王（サタン・カロリー）』……これはなんなんだろう。字面からしてかなり強そうなんだけど、このスキルの説明はないのかな」
わたしはステータス画面に表示されている『暴食の魔王（サタン・カロリー）』という文字に触れてみた。
すると、ステータス画面の上に覆い被さるように、新たなウィンドウが現れる。
え～と、なになに――

固有スキル：暴食の魔王（サタン・カロリー）
食べ物から摂取したカロリーを自由に魔力へ変換することができる。魔力量は無限。全属性の魔法適性アリ。魔法発動時の魔力変換効率が最大となる。

「いや、明らかにチートじゃん!?」
わたしはあまりの驚きに思わずガバッと起き上がる。
パンパンのお腹が張って少し苦しいはずなのに、今は固有スキルの性能の方に注意がいって気にならない。
急に体を動かしたけど、ステータス画面はわたしの顔についてきて変わらず目の前に表示されていた。

「魔力量無限……全属性の魔法適性……魔力変換効率も最大……。うん、何度みても規格外だよね、コレ」
さすがにこのレベルの強さがこの異世界の常識なんて言わないよね？
こんなバケモノがゴロゴロしてるなら、わたしはちょっとこの世界で生きていける自信がない。
「それに、一番気になるのは〝カロリーを魔力に変換できる〟ってところだよ！　カロリーを魔力に変えれるってことは、つまり食べれば食べるだけ強くなるってことでしょ？　え、こんなの最高じゃん」
しかもカロリーを魔力に『変換』してるわけだから、元のカロリーはなくなるってことだよね。
ということは、バクバク食べまくっても全部魔力に変換していけば太らないのでは？
瞬間、わたしの脳裏に激震が走る。
「ああっ！　も、もしかして、さっき服が緩く感じたり、体が軽くなったような感覚があったのは、この能力のせいなのか⁉　わたしの脂肪を魔力（カロリー）に変換して、電撃魔法やバリア魔法を発動していたってこと⁉」
あの時は、そんな都合よく痩せることはないでしょ～、なんて考えて気のせいだと思っていたけど、本当に脂肪が魔力（カロリー）になって無くなってたんだ！
でもお肉を食べまくってカロリーを補給したから、今は元の体型に戻ったのだろう。
ということは、カロリーをあんまり保持していない状態で派手に魔法を使うと不味い事態になるかもしれない。最悪の場合、栄養失調になってしまうかも……！

あくまでも推測だけど、無尽蔵に魔法を発動できるわけじゃないってことは頭に入れておこう。
「ただ、メリットとデメリットを天秤（てんびん）にかけてみても、圧倒的にメリットの方が大きいチートスキルには変わりないけどね」
わたしの心はワクワクな高揚感（こうようかん）に満たされていく。
なぜなら、ようやく異世界であの悪魔のセリフ、「わたしって食べても太らない体質だから～。なんでも気にせず食べちゃうの～。うふふ～」を言えるようになったということなのだから⁉
わたしが幼いころから夢だった、『太らない体質』がまさかこんな形で叶うことになるなんて！
ありがとうフェリシア様！　ぶっちゃけテンション高めでちょっと合わないなぁ、とか思ってたけど、いま初めてフェリシア様との出会いに感謝したよ⁉
まぁしばらくは魔力のためにぽっちゃり体型で過ごすけど、それでも嬉しいものは嬉しいのだ⁉
「よっしゃー！　これぞ異世界のゼロカロリー理論！　これでもうカロリーなんて邪悪な物質への悩みも罪悪感もなくなるぞぉおおおおおおおお⁉」
「ぷるーん！」
わたしは歓喜（かんき）に立ち上がり、バンザイして人生最大の喜びを全力で噛みしめる。
もうお腹の苦しさなんて感じない！　今はただ、全身を駆け巡る興奮に身を任せるだけだ。
わたしが狂喜（きょうき）しているからか、サラも一緒にぽよぽよ跳ねて真似してくれている。
「この調子で他のスキルも見てみようか！　ええと、アイテムボックスは想像通りのものだろうし、その次の『マシュマロボディ』っていうのはなんだろう？」

気になったので、スキル欄の『マシュマロボディ』をタッチする。

スキル：マシュマロボディ
打撃系・衝撃系のダメージを完全無効にする。

ふむふむ、なるほど。
どうやらこのマシュマロボディというスキルがあれば、打撃や衝撃を受けてもへっちゃらになるらしい。
そういえば、ギガントボアの背中から落下した時も特になんともなかったな。
あの高さからぽっちゃりが落下したら全身の骨が砕けててもおかしくないんだけど、無傷だったのはこのスキルがあったからだったんだね。
「あとは、この『食の鑑定』ってスキルか。ＮＥＷ！　って表示されてるけど、ギガントボアを倒したことで新しく獲得したスキルなのかな？」
『食の鑑定』をタッチした。

スキル：食の鑑定
食品や食材に関する情報を調べることができる。

ふむ、どうやら名前の通りのスキルみたいだね。
普通の鑑定じゃなくて『食の鑑定』だから、そういった食べ物関係に強い鑑定スキルなんだろう。
ぽっちゃりには嬉しいスキルだ。
「よし、これでスキルのチェックは完了！　こうなったら、ぐずぐずしてはいられない！」
異世界のゼロカロリー理論をこの身に宿したわたしは、新たな決意に心を震わせていた。
え、どんな決意かって？　ふっふっふ、それはね――
「さっさとこの森を抜けて、この世界の美味しい食べ物を片っ端から食べまくってやるぞー！」
「ぷるん！」
目指すは食の世界制覇である!!
「よし！　それじゃまずはこの森を出て、人が住んでる街を探しに――」
行こう！　と言い終える瞬間、遠くから叫び声が響いてきた。
「きゃぁあああああああああああ!!」
突如聞こえてきた女の子の悲鳴に、わたしは目を見開いて硬直した。

第三章　お嬢様を救出しちゃう、ぽっちゃり

思いがけず森の中に響き渡った女の子の悲鳴に、わたしは固まってしまう。

な、なんだ今のは!?　突然何ごと!?
「あれって叫び声、だよね……？　もしかして、誰か襲われてるの!?」
ついさっきわたしもゴブリンやギガントボアと戦ったばかりだし、可能性は高い。
そもそもこの森自体もろに魔物とか潜んでそうだしね。
もし魔物に襲われてるなら早く助けにいかないと！　なんだけど……。
「ぬぐぐ……か、体が重い！」
わたしはぷるぷると体を震わせながら立ち上がる。
異世界流のゼロカロリー理論で有頂天になっていた時は幸福感に酔いしれていたけど、悲鳴のせいで我に返ったためか一気に体の重さがぶり返してきた。
ギガントボアの肉を食べすぎてしまったためにめちゃくちゃ体が重くなっている。
この状態でいきなり激しい運動をしたらお腹が痛くなって、最悪リバースしちゃいそう。
困った様子のわたしを見て、サラが心配そうに近寄ってくる。
「ぷるぅん……」
「あはは、大丈夫だよサラ。ちょっと急に動いてお腹がビックリしちゃってるだけだから、心配しないで」
とはいえ、このままだとロクに動けない。
どうしたものかと考えていると、一つのアイディアを閃いた。
「そうだ！　こういう困った時こそ、魔法の出番だよね！」

立ち読みサンプル
はここまで

この世界には魔法という便利なものがある。
それを使わない手はない。
今しがたお肉を食べて魔力も補充したばかりだし、何か使える魔法はないかと模索する。
要はこの重い体を俊敏に動かせるようになればいいから……あのメジャーな魔法を試してみよう！
「さあ、わたしに軽やかに動き回れる力を与えたまえ――身体強化！」
全身から力が溢れ出るイメージで魔法を発動してみると、わたしの体がほんのりと赤く光った。
その赤い光はすぐに消えたけど、魔法の効果は瞬時に現れる。
おお、すごい！
一気に体が軽くなった！
わたしはぴょんぴょんとその場でジャンプしてみる。
だけど、体の負担は微塵も感じない。満腹の胃袋の気持ち悪さもなくなった。
それどころか、今までにないくらい絶好調に体が動くよ！
これなら全力疾走して危険な目に遭っている女の子を救うことができそうだ！
「よし、これで問題なく助けに行ける！　それじゃあサラ、急いで女の子の元へ駆けつけよう！」
「ぷるん！」
わたしは周囲に張っていたバリアを解除し、サラを肩に乗せて走り出す。
目指すは、女の子の悲鳴が聞こえた場所だ！